

学位論文審査報告書

氏名：上野 隆平

学位の種類：博士（文学）

論文題目：『大乘莊嚴經論』の仏陀観—Pratiṣṭhādhikāra（基盤の章）の研究—

I. 前言

上野隆平氏が提出した学位請求論文「『大乘莊嚴經論』の仏陀観—Pratiṣṭhādhikāra（基盤の章）の研究—」（A4版、xx頁＋本論129頁・副論159頁、計400字原稿用紙814枚相当）は、インド大乘仏教唯識派（瑜伽行派とも称される）の重要典籍である『大乘莊嚴經論』（*Mahāyānasūtrālaṅkāra*）の最終章をなす第XX-XXI章「実践行と基盤の章」Caryā-pratiṣṭhādhikāra（漢訳「行住品」・「敬仏品」に相当）及びその諸注釈書の精緻な読解にもとづいて、同学派の仏陀観を解明しようとする研究である。同章は漢訳で二品に分かたれているように、内容的に連続しつつ異なった二つの主題を扱った二部構成となっているが、本論文は特にその後半のpratiṣṭhādhikāra（基盤の章）に焦点を絞り、菩薩道において仏の功德・特質が基盤となってはたらく構造を、先行する唯識派の論書『菩薩地』（*Bodhisattvabhūmi*）の継承と展開という視点から解明し、瑜伽行派の思想史上に位置づけようとする意欲的な試みである。

大乘仏教において、菩薩の実践としての菩薩道と、その道程で志向される究極的な目標あるいは境位たる仏陀観とが、根幹的な重要性を持つ主題であることは論を俟たない。したがって、このテーマに関する個別的研究も数多く蓄積されている。しかしながら、大乘仏教理論化の一完成態ともいえる唯識学説における、仏陀もしくはその諸功德が根拠（基盤）となって自利（向上）・利他（向下）の菩薩行を可能ならしめるというダイナミックな構造を明らかにしたという点で、上野氏の研究は類例のないものであり、その学術的価値は高く評価される。

II. 目次

略号及び参考文献

序論

- 1 『大乘莊嚴經論』とは
 - 1.1 はじめに
 - 1.2 著者
 - 1.3 瑜伽行派における『莊嚴經論』の位置
- 2 テキストについて
 - 2.1 現存状況
 - 2.2 校訂テキストとその翻訳研究
 - 2.3 書誌情報

- 3 本研究の立場
 - 3.1 研究対象
 - 3.2 -pratiṣṭhādhikāra の概要
 - 3.3 先行研究
 - 3.4 本研究の課題と意義

本論

- 1 『莊嚴經論』における-pratiṣṭhādhikāra の位置づけ
 - 1.1 『莊嚴經論』の章数・章分けの問題
 - 1.2 『菩薩地』の構成と Pratiṣṭhā-pāṭala の位置づけ
 - 1.3 『莊嚴經論』の構成と-pratiṣṭhādhikāra の位置づけ
 - 1.4 第 XX-XXI 章の後半部分のみを取り出して研究することの意義
 - 1.5 小結参考資料
- 2 Pratiṣṭhā という章名に関する考察
 - 2.1 先行研究の理解
 - 2.2 『菩薩地』に見える pratiṣṭhā の定義
 - 2.3 『莊嚴經論』の第 XX-XXI 章第 43-61 偈が pratiṣṭhā と称せられることの意味
 - 2.4 小結
- 3 第 XX-XXI 章第 43-59 偈「仏の功德」に関する考察
 - 3.1 仏の功德
 - 3.2 リストの作成方針
 - 3.3 ❶「四無量」～❷「六通」の共功德が新たに追加された理由
 - 3.4 讃歌の形式について
 - 3.5 小結
- 4 第 XX-XXI 章第 60-61 偈「仏の功德」に関する考察
 - 4.1 仏の特質
 - 4.2 清浄法界
 - 4.3 小結

結論

副論

凡例

シノプシス

- 1 『大乘莊嚴經論』（世親釈）の第 XX-XXI 章の梵文校訂テキストと和訳
- 2 『大乘莊嚴經論』（世親釈）の第 XX-XXI 章の藏訳校訂テキスト
- 3 『大乘莊嚴經論広注』（無性釈）の第 XX-XXI 章の藏訳校訂テキストと和訳
- 4 『撰大乘論釈』（無性釈）の第 X 章第 9-27 節の藏訳校訂テキストと和訳

III. 論文の要旨

本論文は『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālamkāra*、以下『莊嚴經論』と略称する)の第 XX-XXI 章第 43-61 偈(以下 XX-XXI.43-61 と略記する)の文献研究を通じて、瑜伽行派の人々が信仰と実践の依りどころとした仏陀像を明らかにすることを目的とする。二千年を超える仏教思想史の展開は、常に仏陀観の発展を中心に行われたとあってよい。同論の仏陀観は、大乘仏教がインドにおいて最盛期を向かえた 4-5 世紀のそれであり、本研究は当該箇所の内容分析を通じて、大乘仏教の仏陀観の核心に迫るものである。

『莊嚴經論』はインド大乘仏教の二大潮流の一つである瑜伽行唯識学派の系統に属するテキストで、兜率天の弥勒(Maitreya)に教えを受けた無著(Asaṅga, 395-470 年頃)の手になる偈頌と、無著の実弟に当たる世親(Vasubandhu, 400-480 年頃)の注釈より成る。同論の章構成は、先行する『瑜伽師地論』の本地分中「菩薩地」(*Bodhisattvabhūmi*)に範を得たもので、両論の対応関係は、章題のみならず、章を構成する主題にまで及ぶことも少なくない(稿末の参考資料を参照)。本稿の研究対象は Caryā-pratiṣṭhādhikāra の名で知られる『莊嚴經論』の最終章の後半部分、すなわち pratiṣṭhā と称せられる部分で、『菩薩地』の最終章に当たる Pratiṣṭhā-pāṭala と対応関係にある。

『菩薩地』の Pratiṣṭhā-pāṭala が「百四十不共仏法」を主題とするのに対して、『莊嚴經論』の-pratiṣṭhādhikāra(以下-pratiṣṭhā°と略記する)は、仏に関する二つの主題より構成される。第一の「仏の功德」(kk.43-59, buddha-guṇa)は、❶「四無量」などの功德を有する仏への「讃歌」であり、第二の「仏の特質」(kk.60-61, buddha-lakṣaṇa)は、「本性」以下の六義をもって仏を定義するもので、同論の仏陀観を端的に表明するものである。

ところで、これらの十九偈は『撰大乘論』(*Mahāyānasamgraha*)の X.10-27 に一括して引用され、「法身の功德」(dharmakāya-guṇa)として転用されている。したがって、当該の XX-XXI.43-61 を読解する際には、『莊嚴經論』の世親釈、及び無性・安慧の複注に加えて、『撰大乘論』の世親釈と無性釈が注釈文献として利用可能となる。しかし『莊嚴經論』の安慧釈に関していえば、XX-XXI.31 の途中までしか現存しないため、当該部分を参照することはできない。また『撰大乘論』の世親釈は、これらの十九偈を引用するのみで、なんら注釈を加えていない。それゆえ XX-XXI.43-61 の注釈文献として参照し得るものは、『莊嚴經論』の世親釈と無性の複注、及び『撰大乘論』の無性釈の三者に限定される。

以上のことを踏まえた上で、当該箇所の先行研究を簡単に紹介し、本稿の意義を明らかにしておきたい。

- (1) 袴谷憲昭 [1983/repr.2001] 「Mahāyānasūtrālamkāra-ṭikā 最終章和訳」『唯識思想論考』大蔵出版。
- (2) 長尾雅人 [2011] 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート—(4)』長尾文庫。
- (3) Étienne Lamotte [1938] *La somme du grand véhicule d'asaGga (Mahāyānasamgraha) Tome II*, Louvain (repr. Université de Louvain Institut Orientaliste Louvain-La-Neuve, 1973).

(4) 長尾雅人 [1987] 『撰大乘論 和訳と註解 (下)』 講談社。

(5) Paul J.Griffiths, Noriaki Hakamaya, John P. Keenan, and Paul L. Swanson [1989] *The Realm of Awakening, Chapter Ten of Asaṅga's Mahāyānasamgraha*, Oxford University Press, New York.

(6) 袴谷憲昭・荒井裕明 [1993] 『新国訳大蔵経 (瑜伽・唯識部 12) 大乘莊嚴經論』 大蔵出版。

(7) 勝呂信静・下川邊季由 [2007] 『新国訳大蔵経 (瑜伽・唯識部 11) 撰大乘論 (世親訳、玄奘訳)』 大蔵出版。

この中、(1)(2)は『莊嚴經論』のXX-XXI.43-61の文献研究に当たる。(1)が当該箇所の世界・無性の両訳に対する訳注であるのに対して、(2)は『莊嚴經論』全体の梵文テキストと訳注の双方を掲載する。一方、(3)(4)(5)は『撰大乘論』の文献研究に相当し、(3)(4)が同論全体の蔵訳テキストと訳注を収録するのに対して、(5)はXとその関連文献の梵蔵テキストと英訳を提示する。いずれも当該のX.10-27を含んでおり、その点で重要である。他方、(6)(7)は両論の漢訳テキストに対する訳注を建前とするが、ときに梵蔵テキストの理解に資する情報を提供する。中でも(7)がX.10-26に対する無性訳(蔵訳)の和訳を提示する点は看過できない。

以上が主な先行研究である。ちなみに、これ以外にも「仏の功德」を構成する個々の徳目——例えば「四無量」や「三十二相八十随好」——に関する研究は多数存在するが、今は『莊嚴經論』のXX-XXI.43-61と直接関係するものだけを選んで提示した。

最後に本研究の意義について簡単に述べておきたい。先ず第一に、上掲の先行研究がいずれも校訂テキストと訳注研究の提示に止まるものであったのに対して、本稿は当該箇所の内容分析に深く踏み込んでいる点が挙げられる。また第二に、副論に収録した梵蔵の校訂テキストと和訳に関しても、先行研究の成果を取り入れながら、より多くの写本ないし版本を参照し、より正確なテキストと和訳の提示を試みた点が挙げられる。

第一章 『莊嚴經論』における-pratiṣṭhādhikāraの位置づけ

本論の第一章では、先ず『莊嚴經論』には章数・章分けの面で未解決の問題が存することを断った上で、本稿が以下の論述において、Caryā-pratiṣṭhādhikāraをXX-XXIと表記する理由について一言した。

次に『莊嚴經論』における-pratiṣṭhā^oの位置づけを論じる前提として、対応関係にある『菩薩地』のPratiṣṭhā-paṭalaの位置づけについて、以下の五点より考察を行った。

- (あ) 第一「持瑜伽処」を始めとする四つの瑜伽処
- (い) 第四「持次第瑜伽処」
- (う) ①「持」を始めとする十法
- (え) 「なにを修学するのか」を始めとする三種の学道
- (お) 荒牧典俊氏の提唱する新古の二層構造

以下に考察の結果を記す。『菩薩地』の *Pratiṣṭhā-pāṭala* は、(あ) 同論の第三「持究竟瑜伽処」の第五章に相当し、(い) 第四「持次第瑜伽処」の説明によると、菩薩道の最終段階で得られる「究極の基盤」(*niṣṭhā-pratiṣṭhā*) について論じる章であるという。(う) また同論の全体を十に分かつ「十法」中の⑩に相当し、(え) 「菩薩行」の修学について「なにを」「いかに」「だれが」の観点より述べた「三種の学道」とは直接かかわりを持たない。(お) 現行の『菩薩地』に新古の二層を見る荒牧氏の仮説の上でいえば、「百四十不共仏法」という『菩薩地』の仏陀論は、同論の「菩提の章」を経て、『莊嚴經論』の「菩提の章」ないし当該の *-pratiṣṭhā*^o の成立へと繋がっていったものと推測される。

さて、以上のことを踏まえた上で『莊嚴經論』における *-pratiṣṭhā*^o の位置づけについて以下の三点より考察を行った。

- (か) 世親釈の理解
- (き) 無性・安慧の両釈の理解
- (く) 智吉祥の理解

考察の結果は以下の通りである。当該の *-pratiṣṭhā*^o の位置づけに関して、(か) 世親釈の中に直接の言及は認められない。(き) しかし無性・安慧の両釈によると、『莊嚴經論』の構成は、「種姓」「発心」「菩薩行 (= 菩提分法)」という『菩薩地』の枠組みに沿って理解すべきというから、もし上に述べた筆者の『菩薩地』理解に誤りがなければ、或いは『菩薩地』の枠組みを『莊嚴經論』に適用する際に、両釈が少しも改変を加えていなければ、*-pratiṣṭhā*^o は『菩薩地』と同様に「三種の学道」とは直にかかわりを持たないというべきであろう。ただしこの点に関しては、両釈の上に明確な規定が見出だせないため、断定的に論じるまでには到っていない。(く) 他方、智吉祥の分科によると、*-pratiṣṭhā*^o は *Caryā*-とともに「いかに修学するのか」(*yathā śikṣante*) の「円成実」(*pariniṣpanna*) に相当し、*Caryā*-を「勝れた因」(*rgyu'i khyad pa*) と称するに対して、*-pratiṣṭhā*^o は「[仏] 果」(*ngo bo*) と称せられ、智吉祥が両者の間に因果関係を認めていることが明らかになった。

また本章では、以上の議論に引き続いて、本稿が XX-XXI の後半部分のみを取り出して研究することの意義についても述べた。本論文は、副論では XX-XXI の全体 (kk.1-61) を扱いながら、本論ではその中の後半部分 (kk.43-61, *-pratiṣṭhā*^o) のみを考察の対象とする。というのは同章が前半部分の *Caryā*-と、後半部分の *-pratiṣṭhā* の二つの別の主題より成ることは明らかで、種々の点から考えて、後半部分のみを取り出して考察することは可能であると判断したからである。すなわち説相や内容の面からいっても、『菩薩地』との対応関係からいっても、また無性や智吉祥の注釈からいっても、両者を区別して考えることは妥当である。

第二章 *Pratiṣṭhā* という章名に関する考察

本論の第二章では、*Caryā-pratiṣṭhā*^o という XX-XXI の章名に関する考察を行った。特に後半部分の *pratiṣṭhā* について先行研究の理解に疑義を呈し、『菩薩地』の *Pratiṣṭhā-pāṭala* に見えるこの語の定義に基いて理解すべきことを主張した。

まずは、先行研究の理解を簡単に紹介しよう。袴谷憲昭氏は、蔵訳の *spyod pa dang mthar thug*

pa'i skabs を根拠にして、章名の後半部分を *pratiṣṭhā* から *niṣṭhā* に訂正すべきことを主張された。これによって XX-XXI の章名は *Caryā-niṣṭhā*^o、すなわち「実践と〔その〕究極〔の段階〕の章」と理解すべきであるという。一方、長尾雅人氏は、現行本の *Caryā-pratiṣṭhā*^o を「行の基礎〔づけ〕」と理解しながらも、漢訳の「敬仏品」に相当する *kk.43-61* を *pratiṣṭhā* と称することには疑念を表し、蔵訳の支持を得る *niṣṭhā* であれば「最も万全」と述べている。長尾氏の場合、袴谷氏とは違って *niṣṭhā* への訂正を明言するまでには到らないが、現行本に従って *Caryā-pratiṣṭhā*^o の読みを採用するかぎり、この章名は XX-XXI の前半部分（漢訳の「行住品」に相当する *kk.1-42*）にしか該当しないと考える点で、袴谷氏の理解と一致している。つまり、袴谷・長尾の両氏は「行住品」の「住」を *pratiṣṭhā* の訳語と見なす点で理解を同じくするわけである。それゆえ両氏ともに章の後半部分（漢訳の「敬仏品」に相当する *kk.43-61*）をもカバーできて、蔵訳に根拠をもつ *Caryā-niṣṭhā*^o の方が妥当であるとする。

これに対して、本稿では『菩薩地』の *Pratiṣṭhā-ṣaḍāṅga* に見える *pratiṣṭhā* の意味・内容を検討し、『莊嚴經論』の XX-XXI.43-61 が *pratiṣṭhā* と称せられて然るべき内容をもつことを明らかにした。すなわち『菩薩地』によると、*pratiṣṭhā* とは [1]「三十二相八十随好」から [10]「一切種妙智」に到る「百四十不共仏法」をもって一切の仏事（＝有情利益）をなすことを意味し、菩薩道の実践において、二重の意味で「基盤」（依りどころ）となるというのである。第一に、向上的に菩薩道を歩むものにとっては、仏が百四十不共仏法をもって一切の仏事をなすことが「基盤」となって、自身の修学が可能となる。第二に、ひと度、仏果を得たものにとっては、自身が百四十不共仏法をもって一切の仏事をなすことが「基盤」となって、一切衆生への利益が可能となる。かくして *pratiṣṭhā* は、このような二重の意味で「基盤」といわれるのであって、漢訳の「建立」もその意味は同様であった。

本稿では、以上のような『菩薩地』の規定が『莊嚴經論』にも適用できると考えて、当該の XX-XXI の章名は、現行本のまま *Caryā-pratiṣṭhā*^o の読みを採用し、それを「行と基盤の章」と理解した。ただし *pratiṣṭhā* の内容に関して、『莊嚴經論』が『菩薩地』を換骨奪胎していることを見逃してはならない。すなわち『菩薩地』の場合は、百四十不共仏法をもって一切の仏事をなすことが *pratiṣṭhā* の内容であったのに対し、『莊嚴經論』の場合は、当該箇所を構成する仏に関する二つの主題がそれに当たる。具体的にいえば、❶「四無量」以下二十の徳目より成る「仏の功德」と六義でもって仏を定義する「仏の特質」が *pratiṣṭhā* の内容である。

最後に漢訳の品名に関する本稿の理解を簡単に述べておく。先ず、前半部分に当たる「行住品」について、本稿では、以下のような試案を提示した。すなわち *caryā* の語で一括される *kk.1-42* が「住・地の分析」（*kk.9-41, vihāra-bhūmi-vibhāga*）に多くの分量を割くことから、漢字二字の品名を作成する際に「行」（*caryā*）の上に「住」（*vihāra*）の一字を付加したのではないかと。また後半部分に当たる「敬仏品」については、当該の *kk.43-61* が「讃歌」の形式で説かれていることに起因すると考えて、*pratiṣṭhā* の訳語として「敬仏」の言を想定する必要はないとの見解を示した。

第三章 第 XX-XXI 章第 43-59 偈「仏の功德」に関する考察

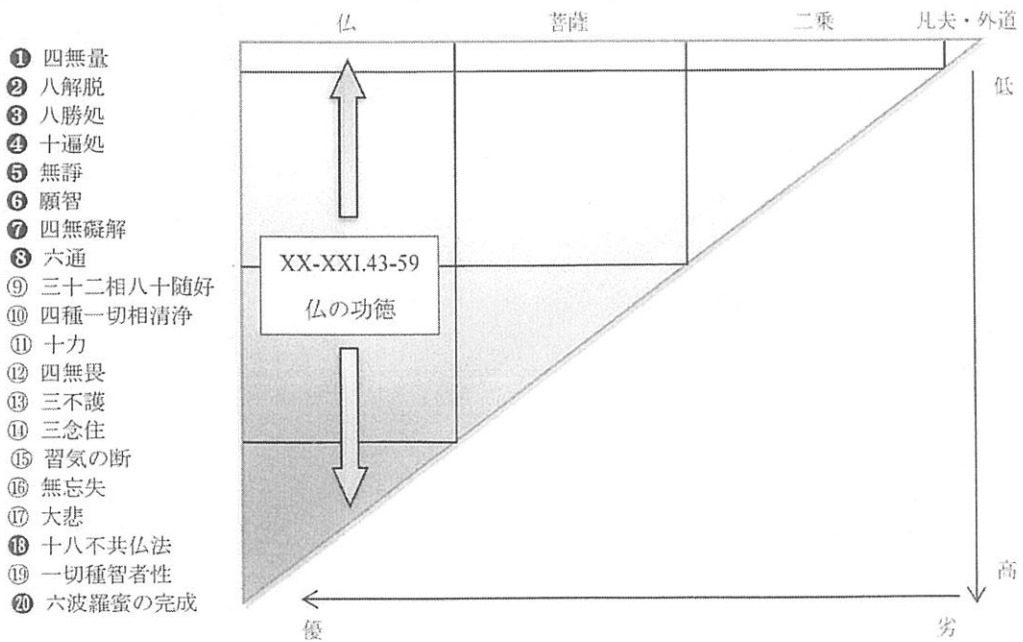
本論の第三章では、-pratiṣṭhā°を構成する第一の主題である「仏の功德」について考察を行った。当該の十七偈が列挙する二十の徳目は、『菩薩地』の「百四十不共仏法」を敷衍することにより組織されたもので、『莊嚴經論』の完全なオリジナルというわけではない。しかし①「四無量」から⑳「六波羅蜜の完成」に到る、このような仏徳のリストを最初にまとめあげたのは『莊嚴經論』であって、以後の瑜伽行派において、このリストは一種の定型として使用された。本稿はこのような「仏の功德」について、以下の三点より考察を試みた。

(一) リストの作成方針

(二) ①「四無量」～ ⑧「六通」の共功德が新たに追加された理由

(三) 讃歌の形式について

以下に考察の結果を示す。(一)『莊嚴經論』の「仏の功德」は『菩薩地』の「百四十不共仏法」に基いて組織されたものであるが、『莊嚴經論』は『菩薩地』が設定した「百四十」の枠組みを踏襲しないことにより、より多くの徳目を導入し『菩薩地』とは異なる独自の仏徳論を形成することに成功した。本稿では、『瑜伽師地論』の所々に散在する記述をもとに、つまり瑜伽行派の一般通念に照らして、『莊嚴經論』が①「四無量」以下の徳目を「凡夫・二乗との共功德（低いもの）⇒ 仏・菩薩の不共功德（高いもの）」という基本方針のもとに配列していることを明らかにした。ただし『莊嚴經論』が二十の徳目を一括して「仏の功德」と呼んでいる点を考慮すると、共功德といえども、仏のそれは、凡夫・二乗（ないし菩薩）を越えて、遥かに高度なレベルで体得されていると言わねばならないし、仏徳としての、②「八解脱」③「八勝処」④「十遍処」⑤「無諍」⑥「願智」を述べる kk.44-46 の世親釈、及び無性釈にはその点が顕著に表れていた。



(二)『莊嚴經論』が「仏の功德」を組織する際に、新たに追加した徳目の多くが共功德であるのはなぜか。本稿では、そこに同論特有の仏陀観——仏は未了義の一乗説をもって、不定種姓のものを大乘に誘引し慰留せんとする——が影響を及ぼしたものと考えて、『莊嚴經論』の一乗説 (XI.53-59) を検討することを通して、共功德の追加問題について考察を試みた。考察の結果、仏徳のリストを作成する際に共功德を導入することによって、以下のような利点があることを指摘した。すなわち、共功德を追加して仏と声聞の間に接点を設けることにより、不定種姓の声聞に対しては、もしかれば大乘に転向しても、声聞乗におけるこれまでの修行の成果が無駄にならないと教えることができる。他方、不定種姓の菩薩に対しては、もしかれば声聞乗に転向しても、最終的には大乘のほかに涅槃を得る道は存在しないから、大乘に残る方が得策であると教えることができる、と。本稿では、『莊嚴經論』が「仏の功德」を組織する際に、多くの共功德を追加した理由をこのように考えた。

(三) 当該の十七偈は、同論の著者が二人称単数形 (あなた) で表記された仏の徳を讃嘆し、その仏に敬礼を捧げる「讃歌」(stotra) の形式で説かれている。偈の d 句に「あなたに敬礼します」(namo 'stu te) の定型句を配する手法は、シュローカと呼ばれる詩形の要求を満たすもので、龍樹『勝義讃』や、マートリチュータ『四百讃』にも見られる典型的な讃歌のそれである。本章では、讃嘆・敬礼の対象となる「あなた」を「瑜伽行派の思想哲学によって大乘化された釈尊」であると推定し、瑜伽行派の人々の間で、この讃歌が実際に使用されていた可能性について指摘した。また、讃歌の形式で「仏の功德」を論じることの異議についても検討し、義浄『南海寄帰内法伝』が述べる仏徳の讃詠に具わる基本的な利益のほかに、『莊嚴經論』に特有の主流派からの大乘批判を回避するなどの意図があったものと推察した。

第四章 第 XX-XXI 章第 60-61 偈「仏の特質」に関する考察

本論の第四章では、『莊嚴經論』の最終章・最終偈にして、-pratiṣṭhā°を構成する第二の主題である「仏の特質」について考察を行った。当該の二偈は「本性」(svabhāva)・「原因」(hetu)・「結果」(phala)・「働き」(karman)・「具備」(yoga)・「生起」(vṛtti) の六義をもって仏を定義するもので、同じ六義をもって「清浄法界」(dharmadhātu-viśuddhi) を論じる IX.56-59 と内容面で多く的一致を見せる。本稿では、この点に着目し、六義の次第に沿って「仏の特質」と「清浄法界」の考察を試みた。

先ず「仏の特質」とは、勝義の完成 (= 真如の浄化) を「本性」とし、十地からの超出をもって「原因」とする、また声聞・独覚を含む一切衆生の最上者となることを「結果」とし、その一切衆生をすべからく解脱せしめる「働き」を有する、加えて、①「四無量」以下の仏徳を「具備」し、有情の宗教的な境地に応じて、自性・受用・変化の三身の別をもって「生起」する、このような属性をもつと説かれる。

一方の「清浄法界」は、無分別智と法界が主客の分裂を超えて、完全に一つとなった菩提の境地を「本性」とし、一切の法門によってその智を修習することを「原因」とする、また一切衆生に利益と安樂を与えつづけることを「結果」とし、三業の化作をもってその一切衆

生を解脱へと導く「働き」を有する、そして、三昧と陀羅尼の二門、及び、無限の智慧と福德の資糧を「具備」し、自性・受用・変化の三身の別をもって「生起」する、と規定される。また本章では、IX.56-59の考察に先立って「法界」の語義についても検討し、この学派において「法界」の語が二種の意味で使用されていることを指摘した。すなわち法界は、無分別智との関係でいえば、「法性」や「法無我」と等置され、「諸存在 (dharma) の本質 (dhātu)」の意味で使用されるが、後得智との関係でいえば、教法流出の根源を示して「聖法 (dharma) の原因 (dhātu)」の意味で使用されていた。dharma-dhātu は智の二面性に応じて、以上のような二義を表し得る便利な語であったのである。

さて、本章では六義の次第に沿って XX-XXI.60-61 と IX.56-59 の内容を比較することにより、両者の間に多くの共通点があることを指摘した。これによって、『莊嚴經論』の著者が讃嘆・敬礼の対象として「あなた」と称する仏は、清浄法界の体現者でもあったことが知られる。前章では、当該の讃歌において讃嘆・敬礼の対象となる仏を「瑜伽行派の思想哲学によって大乘化された釈尊」と推定したが、その推定が誤りでなかったことは、この点からも立証される。

ところで、当該の XX-XXI.43-61 を *pratiṣṭhā* と称する理由について『莊嚴經論』は何も語らないが、『菩薩地』が規定するこの語の意味・内容より補足していえば、仏とその功德が「基盤」となって、菩薩の向上的・向下的な自利利他が成立するとの意味で、「仏の功德」と「仏の特質」が当該の-*pratiṣṭhā*°のもとに配置されているものと思われる。

しかしまた『莊嚴經論』の場合、より広い意味で *pratiṣṭhā* の概念を用いていることも予想される。すなわち『菩薩地』が『瑜伽論』本地分の一章として、三乗各別の立場から声聞・独覚とは別の大乗の菩薩の修道体系を論じていたのに対して、『莊嚴經論』は三乗の相違を認めた上で、二乗との間に接点を見出し、可能性のあるものに関しては、大乘への誘引ないし慰留を模索する態度をとっていた。それゆえ仏とその功德を「基盤」と称する際も、菩薩のみならず、声聞・独覚にとっても、また凡夫にとっても「基盤」であるような仏陀像が想定されていたと思われる。この点が『菩薩地』との相違であり、『菩薩地』にならって *pratiṣṭhā* の語を用いるにしても、『莊嚴經論』がその内容を換骨奪胎していたことを見落としてはならない。

IV. 審査委員会の評価

序論において、インド大乘仏教瑜伽行唯識思想の確立に深く関わる弥勒論書の取り扱い方、『大乘莊嚴經論』の著者問題、同論書の思想史上の位置付け、テキストと翻訳研究、さらにはこの上野論文が直接扱う第 XX・XXI 章の諸問題点などについて、先行研究を詳細に検討し、客観的で妥当な判断をしていることは評価できる。

本論では、先ず『大乘莊嚴經論』第 XX・XXI 章の章立てについて論じている。この章立て問題は、これまでに様々な議論が展開されてきており、単に第 XX・XXI 章を二章に分割するか否かに止まらず、『大乘莊嚴經論』全体の思想枠組み、『大乘莊嚴經論』に先行する『菩薩地』との関連、特に三種の学道との関連、さらには瑜伽行唯識学思想の展開と成立に関わる重大な問題である。

上野論文は、これらの諸問題についても、先行研究を注意深く扱い、様々な問題点を指摘しながら、「今は暫定的に二つの別の主題より成る一つの章と考えるほかない」(p.18)と制御のよく効いた結論に至っている。この結論も現段階では極めて妥当なものである。

ただ、三種の学道について上野論文も「三種の学道をもって同論の構成を理解せよとの指摘は、世親釈には全く見られない」(p.27)と指摘するように、この点をもう一步進めて考察することが望ましい。特に第三の「**ye śikṣante** (誰が修学するのか)」の取り扱いである。先行したであろう『声聞地』(修行主体は声聞)に比して、修行主体を明確に主張する必要のある『菩薩地』では、修行者が「菩薩」であることを強く明示しなければ自らの立場が危うくなるのに対し、修行主体が菩薩であることを前提に菩薩道を考察する『大乘莊嚴經論』では、「**ye śikṣante**」を論じる必然性が希薄となる。それが、『大乘莊嚴經論』全体の枠組みを考えると、**「ye śikṣante」**の位置付けの不明確さをもたらしているとも考えられるからである。

続く「**pratiṣṭhādhikāra**」に関わる考察も、諸注釈書の精密な解説や先行論文などの細かな分析に依拠して、結論は極めて妥当なものであり、高く評価できる。ただし、「同章の後半部分に相当する **-pratiṣṭhā** のみを対象とする」(p.40)という結論からすれば、上野論文の表題サブタイトル「**Pratiṣṭhādhikāra** (基盤の章)の研究」という表記は訂正を要する。独立した章として扱っていると誤解されかねないからである。また、「かくして **Caryā-pratiṣṭhā** という XX・XXI の章名は「行と基盤の章」と理解するのが妥当と考える」(p.51)という結論そのものは穏当である。ただ「**pratiṣṭhā**」は基盤であるが同時に「**pre-eminence, superiority**」(Monier.Williams, Skt.-Eng. Dic)でもある。上野氏自身も「これらの信仰の実際が示されているように感じる」(pp. 92-93)と述べているように、極めて深い宗教的なニュアンスとダイナミズムを孕む語であり、「**pratiṣṭhā**」の訳にはもう一工夫が欲しいところである。更に、本章前半と後半とを分ち後半を研究対象に絞ったことで、両者の内的連関という側面がやや視野から遠のいた点が惜まれる。

章後半の二主題「仏の功德」「仏の特質」について、梵文写本資料及び藏漢訳を用いた厳密な原典批判と諸注釈の丹念な読解(その具体的な成果が極めて有益で学術的価値の高い副論をなしている)、唯識派を中心とした関連諸文献の相互参照(**cross-reference**)といったオーソドックスな文献学的手法を徹底することにより、難解を以て鳴る同論の内容を精確に把握し、唯識思想史上あるいはインド仏教思想史上における意義を明らかにしている。特に、伝統的な仏の諸特性(仏徳)、仏身論(三身説)、清浄法界、といった、そのいずれもが仏教学的に重要で広汎な問題領域を為しているテーマを、簡にして要を得た形で提示しつつ、同論自体の記述するところと有機的に関連づけて論旨の理解を図っている。その作業は同時に一種の相互作用となって、これらの諸テーマを立体的に浮かび上がらせる結果をももたしている。中でも、「不定種姓を大乘に誘因する」という、『大乘莊嚴經論』独自の「一乗・三乗」説の視点を導入して仏の功德を分析している点は高く評価できる。

また、この部分が典型的な讃歌形式をとっていることに着目し、いわゆる讃仏乗の系譜に連なるものであること、またそれが当時の僧院を中心とした仏教徒コミュニティで実際に日常的に享受されていた可能性など、これまで等閑に付されていた側面に新たな光を照射した

ことも評価できる。

以上のように、本論文は、幾つかの問題点と課題は指摘されうるにせよ、原典の精密な解読と分析、先行研究への配慮、論理的な構成と論証、妥当な結論から成り立っており、優れた学術的価値をもつ研究として高く評価できる。

審査の結果、本審査委員会は、上野隆平氏が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2015（平成 27）年 7 月 15 日

主 査：若原 雄昭

副 査：能仁 正顕

副 査：早島 理